

同音異義語の解析と要素

— その共通性と差異性 —

十河直樹

1. はじめに

① 日本語の特徴の一つに、同音異義語がある。

この用語の形態が同一品詞のものもあれば、異なる品詞で、単に同一音形（一方は名詞で一方は動詞の連用形）の形態をとっている形もある。いずれにしろ、和語で現代社会に常用されている語中から、二音節、三音節を抽出して、比較的頻用度の高い用語について解析したい。

② また、用語の解析だけではなく、なぜその音形をとるに至ったか、その要素はそのものの、何に的中し、該当、形態類似していたか、などの点に注目したい。

③ なお、分析中の用語（古書）の表記等は、原書の表記に努めた。

2. 同音異義語（和語）の解析と要素点

1) アカ=赤、垢、滌

			運		〃	〃	身			
			歩		〃	〃	でが	体	固	注
		万色	〃	を	を	汚	寄	に	く	刮
		葉葉	と	水	と	塗	れ	付	僅	な
		集集	〃	〃	る	る	る	着	か	る
音形	用字・古字									別称（語）

アカ	赤	安可	〇〇	〇	〇〇	〇	〇	ア、セキ
	滌			〇〇〇	〇〇		〇	カネ
	垢	阿可	〇	〇	〇	〇〇	〇〇〇〇	

★要素 赤は、赤色の略称。七色の内の一つで、鮮血、血の色である。緋、紅、朱色

などの総称でもある。危険、危険信号、注目を促す色としての意味も含まれ、情熱奮起、発動などの促進的効果のある色でもある。垢は、身体から分泌物の汗など大気中、衣類等の塵埃等が混在して、皮膚の表面に付着したもの。滲は、船底にしみ込んできた水。水を忌んで言う。

アという音節には、始まり、初めて、最初など、物事の「始まり」の要素が含まれているように思われる。カは、固い、鋭い、強固などの要素。つまり、赤も滲、垢も内（物体・船体・身体）から滲み出た、最初の物体という点で共通する。

2) カキ=牡蠣、垣、柿			ゝ	表		
			ゝをゝ	皮		
古藤和アイ			を巡の干吊ゝ	が		
事木名			もら剥ししの	固食		
音形	用 字	古字	記簡抄	ぐす身 殻	い用	別称 (語)

カキ	牡蠣	蠣	河鬼	〇〇		〇〇	〇	〇〇
	垣	牆	賀岐	〇	〇	〇		〇
	柿			〇	〇	〇	〇〇〇	〇〇

ア＝崇峻紀訓 イ＝平治・信賴降参事

★要素 カキ（垣）は、ヤエガキ（八重賀岐）など、他地との一線をカクス（画す）＝外・内、など、カは強固にして、クは組する。時代的にカキ（垣）～ガキの音節は、行政上、社会上、個人的な点での一面か、カク（掻く【靈異記、下】）が元にあって、その連用形のカキか。

3) キリ=桐、霧、錐、切り				二自	
				等然	
				辺に	
				丨 丨 丨	臺三で
				丨 一のノ	物筒角き
音形	用字・古字	アイウエオカキ	雨葉刃ハ	体形形る	別称（語）

キリ	桐	桐	〇	〇〇	〇	〇	〇〇〇〇	琴の別称
----	---	---	---	----	---	---	------	------

霧	紀理	○○○	○	○	○	ム
錐	錐	○ ○	○○	○○○		
切り		○				斬

ア=万葉集	イ=和名抄	ウ=新訳華嚴經義私記
エ=白氏文集四天氷点	オ=将門記承德点	カ=新拾遺・雑下
キ=好色二代男		

★要素 桐は、菊とともに日本の皇室の紋章。臺筒形に立ち、花の形態は二等辺三角形状で、霧は、水を人工的に吹いて造った場合も、錐の刃の形態も同形状である。また、霧の粒子（水滴）は、桐の種子に似ている。この粒子は錐で開けた錐粉に似て、臺筒形は、桐の木、錐で開けた穴状に似る。また、「切り」は、[切る]の意と同義。切りがいい。などの諸点からキリという音形が形成されたものか。

キには、区別、決めるなどの要素があるように思う。語尾のりはルの転訛形で、丸い、円筒形、だ円形など、[こんもりとした]要素が導き出される。

4) シマ=島、縞、しま（傘の轆轤(ろくろ)）

			日				
			古万葡		〃〃〃		
			事業辞	屋広	模育流		
音形	用字	・	古字	記集書		様ちし	a b
							別称（語）

シマ	島	嶋, 斯麻	○○	○○	○○○	○	トウ
	縞, 島				○	○	
	しま（傘の轆轤(ろくろ)）		○			○	ロクロ

a = 本体（陸地）から離れている b = 点在している

★要素 本体（陸地）から離れているという点では、島、縞、しま（傘の轆轤(ろくろ)）とも同素。シは、ウシオ（潮）か。=マは、クマ（熊）、ウマ（馬）、トマ（苦）などの =マと同素で、うねりのように、馬の背のような丘陵の形態を指したものに用いている。

5) タケ=丈、竹、岳、茸

				伊	王	ゝ	ゝ		
				古万和勢ア	子袴	がゝの			
				事業名物	がの	あの屋			
音形	用字	・古字	記集抄語		る山地	a b c	別称(語)		
タケ	丈	長	〇〇	〇	〇	〇〇〇			
	竹	多気	〇〇		〇	〇	〇〇	一だけ=陀気	
	岳, 嶽	多気	〇	〇		〇〇〇			
	茸	菌	〇		〇〇	〇			

ア=謡曲・羅生門

a=類似のものと比べ異質な感じに見える(すらりっとしている)

b=高さを感じる

c=猛々しさを感じる

★要素 タケという同音で共通要素は、①a=類似のものと比べ異質な感じに見える(すらりっとしている)②b=一定の高さを感じる点である。あるいはタケル(猛る)の語幹が元になっての呼称か。茸、竹は群生し、丈、岳は徒長的で特異な特徴がある。タケのタは、平たい、平(たいら)、平面な、平野、陸地などの要素が浮かぶ。ケはカ(固い、鋭い、強い)などのものが変化したものに付している。キ(気)>ケ(気), カ(家)>ケ(家), カ(華)>ケ(華), カ(化)>ケ(化)。方言で、タキ(滝=多伎)をタケと用いる地域がある。

6) ヒイラギ=柊、柊

				ゝ	ゝ		
				古ア	のを		
				事	小釣		
音形	用字	・古字	記	花る	a b	別称(語)	
ヒイラギ	柊《植物》	〇〇	〇		〇	ヒヒラギ	
	柊《魚》		〇		〇〇	ケッケ	

ア=新撰字鏡

a = 鱗が小さく夜光性

b = 葉、鰭が針のように鋭い

★要素 海魚のヒイラギ（柊）を知っている人は究めて少ない。雑魚として扱われ、漁師や、魚の専門家、魚の愛好家でないと知らない。庭木にするヒイラギ（柊）は一般的な木。ヒ／イ／ラ／ギと解析する考察もあるが、ヒイ／ラ／ギと分析するのが妥当。ヒイはヒ（檜）の長音化。ラは、体言の接尾語「等」を意味する、同類のものが多数あることを示す義であるが、ラの要素的な元素は、限り。～まで。語尾のギはキ（木）。

ところで、植物のこの木にヒイラギと付したのが早期で、この木の葉の形態と、最も成長している時季の葉の端にあるトゲなどが、魚のヒイラギの背鰭、腹鰭などに似て、針のように鋭いため。食用できるというが、瀬戸内では5 cm前後のものが大半である。

7) ヨル=夜、因る、居る、疲る、寄る、揺る、選る、繕る

音形	用字	・古字	日		余			別称（語）
			古万本アイウエオカキク		歳所			
			事業書		名動ががに			
			記集紀		詞詞くく			
ヨル	夜	用流	○	○	○			ヨ
	因る		○	○○	○		○	
	居る			○	○	○	○	オル
	疲る			○	○		○	
	寄る	余理	○○○		○	○○	○	
	揺る		○	○	○			ユル
	選る			○	○			
	繕る		○		○	○○		

ア=宇津保物語・嵯峨院

イ=南海寄帰伝

ウ=平安後期点

エ=曾根崎心中

オ=謡・鉢木（ハナキ）

カ=武烈紀

キ=日葡辞書

ク=徒然草

a = 身体に関係する

b = 原因がある

★要素 八称抽出のうち、一称のヨル（夜）が名詞。八称ともに、一か所に集まる。とか、とどこおる（滞る）、停滞する。の要素で共通する。ヨは余＝あまり。そのほか。残り。などの要素を含んでいてアサ／ヨル、アサ／ヒル／ヨルなどと、夜は闇夜で生活に意味のない時間と考えていたのか。語尾のルは、リの要素である丸いだ円形が、さらに集約され球態化、球状、球態したもの。これは八称に共通する要素である。

名詞のヨル「夜」もアサ、ヒルが寄って（余って）集約された世界かもしれないと考えるとヨ／ルで、八称ともに同素。

8) ワク＝枠、分く、沸く、湧く、

音形	用字	・	古字	集	万葉集	アイウエオカキク	二	つ水	動別にか	詞 }	別称（語）
ワク	枠、框					○		○			
	分く、別く			○				○	○		
	沸く					○○○		○	○		
	湧く、涌く					○	○○○○	○	○		

ア＝新撰字鏡 イ＝伊勢集 ウ＝銅流灌、金剛波若經集驗記平安初期点
 エ＝色道大鏡 オ＝宇津保物語・祭の使 カ＝能因本（古活字本）枕183
 キ＝日葡辞書 ク＝続猿蓑

★要素 四称の内、ワク（枠、框）だけが名詞である。ワ／クと分け、ワは、囲み、囲まれたという要素が見当できる。クは、組、組する、区別（する）で、四称に要素的に該当する。ワク＝枠・分くは、全体、本体から別にする意が考えられ、形態的には平面的。ワク＝沸く・湧くは別の状態、別の流体として共通要素が検討でき形態的には立体的。

囲みの内側では、別の現象がある状態を指しての同音語。

3. 音（素）・義（和語）の解析と要素（考）

※印は、この論文に掲載した用語／例語である。

●音素がア/a/

- ア アサ、アオ、アカ、アメ、アリ～
- /a/ アは、始め、明か、在る、有る、存在を明示するを意味する。 有／無
※赤、垢、淦／秋、朝、雨
- カ カイ、カオ、カキ、カク、カス、カタ、カメ（瓶）～
- /ka/ カは、固い、鋭い、強固などを意味する。 強／弱
※牡蠣、垣、柿／角、貝、勝
- タ タケ、タナ、タク、タル、カタ、キタ、ワタ～
- /ta/ タは、平たい、平(たいら)、平面な、平野、陸地などを意味する。
丈、竹、岳、嶽、茸、／肩、綿 高／低
- マ マリ、マコ、マエ、マト、シマ、ウマ、コマ、トマ（苦）、クマ～
- /ma/ マは、ものの中心、正心、中枢、重心など、面や、物体の心を意味する。
豆、的、待つ、釜、浜 心／外
- ラ ソラ、クラ、ムラ、トラ、ラジョウモン、ラン～
- /ra/ ラは、限り、～まで、境界などを意味する。
落下、螺旋、裸体、乱暴、乱闘 内／外
- ワ ワキ、ワラ、ワシ、ワタ、シワ、ナワ、クワ～
- /wa/ ワは、囲んだ、囲まれた範囲を意味する。 有限／無限
枠、框、分く、別く、沸く、湧く、涌く

●音素がイ/i/

- イ イシ、イキ、イチ、イワ、カイ、タイ、トイ、コイ～
- /i/ イは、固定された場所、処を意味する。 静／動
息、石、磐、貝、鯉、樋、塀
- キ キシ、キリ、キル、キタ、トキ、マキ～
- /ki/ キは音素にイ /i/がある。イは、切る、切断するを意味する。
要素は、基か。 全体／分化
※桐、霧、錐、切り／北、肝、岸
- ギ スギ、サギ、ハギ、クギ、ギガン、ギソク、ギクラ～
- /gi/ ギは、長さを意味する。 長さ／広さ
- シ シマ、シオ、シリ、シタ、シロ、コシ、クシ～
- /si/ シは、長さ、流れなどものの、有形線を表示した意味を表わす。
※島、縞、しま（傘の轆轤(ろくろ)）／城、腰、年 線／点

ヒ ヒ, ヒサシ, ヒカリ, ヒグレ, ヒル, ユウヒ～

/hi/ ヒに付いては不詳。

柊《植物》、柊《魚》

リ トリ, マリ, クリ, コオリ, ハリ, コリ～

/ri/ リは、ルの転訛形で、丸い、球形、こんもり（とした）など、固まった様子を意味する。 球形／無形

※桐、霧、錐、切り／尻、凝り、反り、減り

●音素がウ/u/

ク クリ, クス, クワ, クサ, サク, トク, ナク, ラク～

/ku/ クは、ある形態が変化するを意味する。 正常／変化

割、栗、雲、蜘蛛、棠、空、皿、曹白魚、平(ひら)～

ル マル, サル, コオル, ホオル, トル, ルス, ルテン～

/ru/ ルは、丸い、球形、こんもり（とした）などを意味する。 球形／無形

※夜、因る、居る、疲る、寄る、揺る、選る、繕る

●音素がエ/e/

ケ サケ, タケ, コケ, シケ, ケタ, ケサ, ケラ（螻蛄）～

/ke/ ケはカ（固い、鋭い、強い）変化か、またはキの要素の基が変化したものか） 有形／無形

酒、苔、螻蛄

●音素がオ/o/

ヨ ヨメ, ヨシ, ヨキ, ヨコ, ヨイ, ヒヨ（鶉）～

/jo/ ヨは、中心、中枢より末尾、外郭の範囲を意味する。 中／遠

夜、嫁、斧、横、鶉

要素からの指示音表（この論文で扱った音のみ掲載）

要素 母韻 子音 説

明 要 素

存在を意味する	ア 有／無	カ	カは、固い、鋭い、強固などを意味する。	強／弱
		タ	タは、平たい、平(たいら) 平面なを意味する。	高／低
		マ	マは、ものの中心、物体の心を意味する。	中心／外
		ラ	ラは、限り、～まで、境界などを意味する。	内／外
		ワ	ワは、囲んだ、囲まれた範囲を意味する。	有限／無限

固処定をさ意味した場所、	イ 静／動	キ	キは、切る、切断するを意味する。	全体／分化
		ギ	ギは、長さを意味する。	長さ／広さ
		シ	シは、有形線を表示した意味を表わす。	線／点
		ヒ	不詳	
		リ	リは、固まった様子を意味する。	球形／無形

無意を意味す	ウ	ク	クは、ある形態が変化するを意味する。	正常／変化
		ル	ルは、丸い、球形などを意味する。	球形／無形

変化	エ	ケ	ケはカ、キの要素の基が変化したものか。	有形／無形
----	---	---	---------------------	-------

	オ	ヨ	ヨは、中心、中枢より、外郭の範囲を意味する。	中／遠
--	---	---	------------------------	-----

4. おわりに

- 1) 考えてみれば、一音節、三音節にもかなり同音異義語はある。二音節にもここに揭示しなかった以外に、端と橋、箸や、倉と鞍、蔵の違い。針と梁、鍼などある。
- 2) ただ、明確に言えることは二語同時に用い出したとは考えられない点。つまり、基語、基礎語になる語がある。という検討がたったということである。キリは霧で、シマは島。ヒイラギは疼木《植物》、ヨルは寄るなどが、当初持っていた古代人の用語であろう。
- 3) 現在の日本語音は、清音、半濁音、濁音、拗音、撥音、破裂音など、五十音図譜に揭示しているが、同音同素語譜という形態図譜を検討できそうである。
- 4) つまり、チという音の要素が明確にその体系がみえた暁には、苅、血、知、地、千など同音異義語の集団での要素は、「○○○○○○だ。」と整理できる。それは古代日本人のものの考えた方、文化の広さ、思考の深さを知るうえに多大の効果を示すことになる。
- 5) 「同素異語」という新語も考えられる。その系譜を検討すれば、ヒイラギ→疼木《植物》→疼《魚》，キリ→霧→桐→錐などの類推過程も非常におもしろい。それがこの研究の一端である。